

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳とは

山岡洋一

- 音楽からの類推

音楽はかなりの場合、作曲家が楽譜に書いた「原作」を、歌手や演奏家などが音に「翻訳」して聞き手に届ける。原著者が書いた「原作」を、翻訳者が「翻訳」して読み手に届けるのが翻訳だから、よく似た経路をたどるといえる。この点を考えていくと、原著と翻訳の関係、翻訳の評価基準、翻訳の性格と役割などについて、類推できる点があるかもしれない。

誰も教えてくれなかった英語 (第2回)

柴田耕太郎

- andの働き

「並列の and」では、and を核とする言葉の結びつき方を見たが、今回は and がどういう意味合いで言葉を結びつけているか、言葉が結びつく上での and の働きを考える。

名訳

山岡洋一

- 吉田健一訳『ロビンソン漂流記』

吉田健一は、対訳としての「正確さ」を追求するのではなく、小説を楽しもうとする読者に親切な文章を書く姿勢をとっている。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

音楽からの類推

山岡洋一

読んで楽しい哲学書という、形容矛盾ではないかと思えるかもしれないが、まさに楽しい哲学書が最近出版された。ニコラス・ファーン著中山元訳『考える道具〔ツール〕』だ。古代から現代まで、20人余りの著名な哲学者について、それぞれがどのような理論を構築したかではなく、どのような「道具〔ツール〕」を使って考えたかを紹介する本だ。

たとえば第5章の「プラトンの洞窟」には、アナロジー（類比、類推）とアレゴリー（寓喩）という道具が紹介されている。独善的になりかねないので危険でもあるが、便利な道具だというのがこの章の論旨のようだ。

そこで考えてみた。アナロジーという道具を使うと、翻訳について何かが見えてくるだろうか。翻訳と似ていると思える活動を探せば、類比と類推によって何かのヒントが得られるのだろうか。まず思いついたのは、音楽のアナロジーだ。音楽のアナロジーを使って、翻訳について何が分かるだろうか。

もちろん例外もあるが、音楽ではかなりの場合、作曲家が楽譜という形で書いた「原作」を、歌手や演奏家、ミュージシャンなどが音に「翻訳」して聞き手に届ける。原著者が書いた「原作」を、翻訳者が母語に「翻訳」して読み手に届けるのが翻訳だから、よく似た経路をたどるとも思える。この点を考えていくと、原著と翻訳の関係、翻訳の評価基準、翻訳の性格と役割などについて、類推できる点があるかもしれない。

正確さが最重要の評価基準なのか

翻訳批評の場を作りたいというのが『翻訳通信』をはじめた動機のひとつだ。ところが翻訳の批評というと、たいていの人は誤訳の指摘のことだと思ってしまう。無理もない。翻訳批評をたまに目を見ると、大部分が誤訳の指摘なのだから。だが、誤訳の指摘が翻訳批評の本流だとするのは疑問だと思う。傍流にすぎないかもしれない。そういえるのかどうか、音楽の批評と比較して考えてみよう。

翻訳批評の現状をみると、たしかに誤訳の指摘が圧倒的に多い。この事実をみると、翻訳の評価基準のなかで、「正確さ」がいちばん重要だとされているよう

に思える。もちろん、誤訳だらけの翻訳を読まされるのはかなわない。誤訳は少ないほどいい。だが、正確さがいちばん重要な評価基準かどうかは別問題である。もっと重要な基準があるかもしれない。そこで音楽の例をみていくと、面白い事実気づく。

音楽でも、正確さが問題になることがある。たとえば、音程が外れればなし、リズムが狂えばなしの歌を聞かされると、聞いていられないと言いたくなる。だが、これは例外であり、正確さが話題になることはあまりない。なぜ正確さがあまり話題にならないのかは、正反対の例、つまり正確無比の演奏の例をみてみれば分かるかもしれない。

コンピューター技術の進歩はすさまじいようで、いまでは音楽を演奏するぐらいの芸当はみごとにやっけるという。楽譜を入力しておけば、もちろん100分の1秒の狂いもなく、100分の1ヘルツの狂いもなく、まさに正確無比に演奏するという。機械翻訳はいまだに、笑い話のタネをたくさん提供してくれる状況なので、音楽ソフトはすごいと思う。

だが、寡聞にして「機械音楽」の発達で歌手や演奏家、ミュージシャンが失業したという話は聞かない。また、音楽CDなんぞは時代後れで、いまや音楽ソフトで音楽を聞く時代になったという話も聞かない。音楽をパソコンで聞く人はたくさんいるが、音源は昔どおり、人間が演奏し歌ったものであって、正確無比の「機械音楽」によるものではない。

では、音程やリズムの正確さという点ではコンピューターにかなうはずがない人間の演奏をなぜ聞くのか。そう質問すると、音楽好きにじろりとにらまれるのではないだろうか。「機械音楽」は楽譜にまったく忠実であっても、「表現」ではない。音楽とは表現であって、音を組み合わせただけのものではない。この点を誰でも知っているから、「機械音楽」がいくら正確無比でも、試しに聞いてみようと思う人はいない。

音楽にははた迷惑な歌もあれば、風呂につかったの鼻唄もある。だが、ここで考えているのはプロの演奏と歌だけだ。プロは演奏し歌うとき、何かを表現し、聞き手に伝えようとしている。だからこそ聞き手には

音の組み合わせだけではない何かが伝わる。表現し伝達するのが音楽であり、正確無比だろうが何だろうが、音を組み合わせただけで音楽になるわけではない。

この点をよく示すのが、スタジオ録音よりもライブ演奏の方が感動が大きい事実だろう。スタジオ録音の場合には、間違いを修正していることが多いので、正確さという点では優っている。ライブでは当然ながら音程が外れたり、音が飛んだりすることがあるので、正確さという点では劣っている。しかし、ライブはスタジオ録音よりも、「表現」としての質が優れている場合が多い。

要するに、音楽の質を判断するとき、間違いがどこまで少ないかはあまり重要な基準ではない。音程やリズムの正確さよりもはるかに、表現としての質が重視されている。たとえば「音楽性」といった言葉、「力」とか「感動」とかの言葉で語られているのが、表現としての質の高さである。

以上の音楽の例から類推して翻訳の質についても、そうの外れになるとは思えない。翻訳の成果である本や文書は、言葉を組み合わせただけのものではない。読者に何かを伝えようとする表現である。小説などのフィクションでは表現であることが明らかだし、たとえば経営書や技術文書などでも、読者に伝える内容に違いはあるが、何かを伝えようとしていることに変わりはない。翻訳者は何よりも表現者であり、原著から読み取った何かを読者に伝えようとしている。優れた翻訳家であれば、かならずそうしている。伝えようとしているからこそ、読者に伝わるのだ。

正確無比の「機械音楽」は誰も聞こうと思わない。正確さで優るスタジオ録音よりも、少々傷はあっても力のあるライブのほうがいい。だったら、少々傷があっても、表現としての質が高い翻訳がいいという価値観があってもいい。誤訳の多寡は翻訳を評価する際の基準として絶対のものではないし、最重要のものですらなく、表現としての質の方が重要な基準だと考えることもできるだろう。

表現者としての翻訳者

表現しているのは原著者であって翻訳者ではないという意見もあるだろうか。もしそう考えるのであれば、同じ考えを音楽にあてはめてみるといい。何かを伝えようとしているのは作詞家や作曲家であって、歌手や演奏家ではないと考えるのだろうか。

そう考えるはずがないことは、簡単な事実をみれば明らかだ。いま流行りの歌でも、昔の流行歌でもいい、好きな歌を10あげる。そして、それぞれの歌手と作曲家と作詞者をあげていく。作曲家や作詞者の名前を知っている歌は半分もないのが普通ではないだろうか。たとえば、「亜麻色の髪の乙女」は誰の作曲だろうか。「大きな古時計」は誰が作曲したのか。「地上の星」は。そう、「地上の星」だけは知っている。シンガー・ソングライターの歌だから。

歌手の名前を知っているのに、作曲家や作詞者の名前を知らないことがあるのは、歌手や演奏家が音楽を聞き手に届けてくれる直接の表現者だからだろう。作曲家や作詞家は、歌手や演奏家を介して音楽を聞き手に届けるので、間接の表現者だといえるのかもしれない。直接の表現者の方が印象が強いから、名前もよく覚える。

直接の表現者の力をよく示すのがいわゆるカバー曲だろう。同じ曲でも歌手や演奏家が違えば、違った印象の曲になる。もちろん、編曲の違いという要素も加わるからだが、編曲も同じでも、印象は違う。歌手や演奏家、ミュージシャンが表現者として強い力を持っているからだ。

翻訳の場合はどうだろう。たとえば、最近読んだ翻訳物の題名をあげて、それぞれの原著者と翻訳者の名前をあげていく。原著者の名前を忘れた本がいくつかあるかもしれない。だが、それ以上に忘れてるのは、翻訳者の名前ではないだろうか。

原著者の名前はある程度覚えていても、翻訳者の名前は覚えていないのは何故なのか、ここで追求しようとは思わない。だが、音楽と同じように、翻訳でも、翻訳者が違えば印象がまったく違った本や文書になることを指摘しておきたい。ひとつの本に複数の訳があるものを読んでみれば、この点はすぐわかる。たとえば『ファウスト』なら森鷗外訳と池内紀訳、『精神現象学』なら金子武蔵訳と長谷川宏訳を比較してみるといい。翻訳者は表現者であり、原著から読み取ったものを読者に伝えようとしている。翻訳者が違えば、読み取るものが違い、訳文が違ってくる。

もうひとつ、音楽の場合、作詩や作曲と演奏や歌唱が別の活動だと考えられている点にも注目したい。作曲家として優れていても、歌手や演奏家、ミュージシャンとして優れているとはかぎらない。だから、自分が作曲した曲は自分で演奏し自分で歌うという人は

そう多くない。

翻訳の場合にも、同じことがいえるように思える。著作と翻訳とは違った活動なのだろう。小説家が小説をうまく翻訳できるとはかぎらないし、学者が自分の専門分野の本をうまく翻訳できるとはかぎらない。できない場合の方が多いのではないだろうか。

翻訳は語学の仕事か

翻訳は語学の仕事だといわれることが多い。この見方が正しいかどうか、音楽の例をみてみよう。

演奏や歌唱はある意味でスポーツに似たところがある。たとえば歌をうまく歌うには、声帯の運動能力が高くなければならない。いわゆる音痴というのは、声帯をうまく制御できないことを意味するので、有名な演奏家が音痴だったりすることがある。耳はいいし、腕と指の運動はうまいので、たとえばピアニストとして著名であっても、声帯の運動能力が低ければ、歌は歌えない。だから、歌手とは声帯の運動能力が人並み外れて高い人だともいえる。

だが、演奏や歌唱が運動だといえ、誰でも首を傾げるはずである。たしかに声帯などの運動能力が高くなければ歌は歌えないし、腕や指などの運動能力が高くなければ楽器は弾けない。たしかに運動能力は重要だが、それだけではない。それだけでは歌手や演奏家、ミュージシャンになれない。

同じことが翻訳にもいえる。たしかに、いわゆる語学力、つまり外国語で書かれた原著を読む力がなければ翻訳はできない。しかしそれだけでは翻訳はできない。翻訳とは何よりも、原著から読み取ったものを読者に伝える活動である。伝える姿勢があり、伝えられる表現力がなければ、何も伝わらない。

音楽にもいろいろあるように.....

以上では「音楽」という言葉をとくに分野を限定せずに使ってきた。しかし誰でも知っているように、音楽にはさまざまな分野がある。クラシックもあれば、ジャズ、ロック、フラメンコ、演歌、民謡などもある。音楽とはこれらすべての分野の総称だ。

翻訳にもやはりさまざまな分野がある。法律文書の翻訳と小説の翻訳では、きわめて大きな違いがある。コンピューター・マニュアルなどの技術文書、経営や経済などの研究書とノンフィクション、映画やドラマの字幕や吹き替え、雑誌や新聞の記事など、じつにさ

まざまな分野があり、分野ごとに性格が違い、要求されるものが違っている。

ジャズ・ピアニストに津軽三味線を弾いてもらおうとは誰も考えないし、オペラ歌手にエレキ・ギターを弾いてもらおうとは誰も考えない。音楽といっても分野が違えば大きな違いがある。翻訳にも同じことがいえる。

その他の類推

他にも、音楽からの類推で分かる点がある。そして、分からない点もある。

たとえば、音楽を学び、練習する人はきわめて多いが、そのなかでプロになれる人はごく少数しかいない。プロになれても、音楽で食べていける人はきわめて少ない。同じことが翻訳にもいえる。翻訳学習者はきわめて多いが、そのなかでプロになれる人はごく少数しかいない。プロになれても、翻訳で食べていける人はきわめて少ない。

音楽を学ぶ人が多いので、音楽教育が大きな産業になっている。大学から街の音楽教室まで、じつにさまざまな教育機関がある。音楽で食べていけなくても、音楽教育でなら食べていける人も少なくない。翻訳でも学習者が多いので、翻訳教育がちょっとした産業になっている。翻訳の仕事はできなくても、翻訳教育でお小遣いを稼いでいる人が少なくない。

音楽の場合、誰でも名前を知っているコンクールがいくつもあって、新人の登竜門になっている。翻訳もそうになっているはずだと思えるかもしれないが、この類推は間違いのようだ。翻訳のコンクールはたしかにいくつかあるが、「誰でも名前を知っている」ものにはなっていない。名前があまり知られていないのだから、権威あるコンクールとはいえず、したがって登竜門にはなりにくい。

もうひとつ、大きな違いがある。音楽の場合、大ヒットがあって知名度があれば、一生困らないだけの収入と仕事を確保できる。翻訳の場合も翻訳書で大ヒットがでることがあるが、しばらく食べていける収入が入るだけで、すぐにまた貧乏に逆戻りする。音楽なら、ごく一部ではあっても優雅に暮らしている人がいるが、翻訳で優雅に暮らしている人の話は聞いたことがない。この違いだけは当面、なくなりそうにない。

and の働き

柴田 耕太郎

「並列の and」では、and を核とする言葉の結びつき方を見たが、今回は and がどういう意味合いで言葉を結びつけているか、言葉が結びつく上での and の働きを考える。

and の働きは、大きく分けて次の六つ。どれにあたるか常に意識すると論理の流れがしっかり読めるようになる。

(1) 対等

and の前後の資格が同じ。単語なら対句、文なら対比が多い。

代表的な訳語*：「...と」

(2) ゆるい順接

対等に近い。同時性を示すか、前からすんなり意識が流れる。

代表的な訳語：「また」

(3) きつい順接

時間の流れが感じられるか、少し因果が感じられる。

代表的な訳語：「そして」

(4) 前節の帰結

and をはさんで、因果がはっきりしている。

代表的な訳語：「それで」

(5) 逆接

but に近い。

代表的な訳語：「なのに」

(6) 付加

後半部分を強調する。

代表的な訳語：「それも」

*覚える便宜のため、強いて一語で対応させれば、ということ

1、基本例

(1) 対等

He is a writer and statesman.

(彼は作家兼政治家だ)

*作家で政治家、彼はふたつの職業を兼ねている

(2) ゆるい順接

All of us sleep and dream.

(だれも皆、眠り、夢をみる)

*「眠りながら夢を見る」とも「眠って夢を見る」とも訳せる。眠るのと夢を見るのが一体だとも、眠ってから夢をみる時間差とも、眠ることと夢をみることを並べただけとも、どうとでもとれる。というかそれら全部を含めて、ぼやっと言っている。読み手の意識も and の意味を分析的に考えることなく、sleep し dream する、と前からすんなり流れてゆく。

(3) きつい順接

We had a week in Paris and went to Tokyo.

(一週間パリにいて、東京へ行った)

*「パリ滞在のあと東京へ...」「パリに寄って、東京へ...」とも訳せる。動詞が同じ時制で並んだ場合の行為の順序は、当然ながら前が先、後ろがあと。and の前後が時系列で流れている。その時間の流れを、ゆるい因果と考えることもできる。

(4) 前節の帰結

He was very tired and went to bed early.

(疲れていたから早く寝た)

*「疲れていたから」「疲れていて」とも訳せる。and の前後が、原因と結果、理由とそれによる行為・現象で対比される。きつい順接と区別が付きにくいこともある。また、因果を強めに訳すと、押しつけがましく感じられることもある。

(5) 逆接

So rich, and he lives like a beggar.

(金持ちなのに、彼の生活は乞食みたいだ)

*「金持ちだが」「金持ちでいて」「金持ちのくせに」とも訳せる。and の前後が強く対照される。「そして」と訳して通じることもあるが、これは日本語の「そして」にも、逆接の感じが入ることがあるから(「金持ちだ、そして乞食みたいに暮らしている」)。

(6) 付加

He likes to read, and to read out loud.

(彼は本を読むのが、それも音読が好きだ)

*「かつ音読が好きだ」「おまけに音読が好きだ」とも訳せる。and の前にいったことにさらに言葉を付け加えるのだから、強調的な訳語になればよい。

2、短い文例で点検してみましょう

(1) 対等：イディオムに多い。(2)と区別しにくいこともある

・ Omar and Salef stood bowing and scraping.

* bowing and scraping はイディオム

(オマールとサレフはペコペコしていた)

・ How could anybody love you and be so unbelievably cruel to you?

* and は同時性を示す。could は仮定法

(愛してくれる人がとても酷いって、想像できますか)

(2) ゆるい順接：これと(1)が六つの分類のなかで一番多い。

(3)ととれることもある。

・ People used to think, and some still do, that Latin should be a universal model for language.

* some people still think that ~

「かつては皆そうだった。また、今でもいくらかの人は...」

(ラテン語は言語の普遍的モデルであるべきだと、かつて人々は考えたし、今でもそう考える人はいる)

・ He gave a gentle smile and said, 'I beg you to believe, madam, that I am not in the habit of stopping ladies in the street and telling them my troubles'.

* 「笑顔を浮かべた。かつ、こう言った」(「そして、こう言った」ともとれる)

(その人はやさしい笑みを浮かべ言いました。「奥さん、信じてください。私は通りで御婦人と呼ばれて、ご面倒をお願いするような性質の人間ではありません」)

・ He was now without his hat and coat, and he was edging his way through the crowd towards the bar.

* edge one's way : 身体を斜めにしてゆっくりと進む

「帽子とコートを脱いでいた。かつ、道を進んでいた」

(もうその人は帽子もコートも脱いで、人ごみをすり抜けカウンターのほうへと向っていました)

・ It is nearly midnight, and I can see that if I don't make a start with writing this story now, I never shall.

* and は単に文と文をつなぐ記号のようなもの。can see(感覚動詞)は、現在進行形の代用

「真夜中近い。私にはわかっている...」

(まもなく十二時だ、今書き始めなければもう書くことはないと自分でもわかっている)

(3) きつい順接：二番目に多い。

(2)、(4)ととれることもある。

・ She never read stories to me at night before I went to bed ; she just 'told' me things instead. And every evening it was something different.

* ' ' クォーテーション・マークは言葉の強調。

「話してくれた。そして内容はいつも変わった」

(母は夜、寝る前に物語を読んでくれはしなかった。代わりにいろんなことを聞かせてくれた。話しの中身は毎晩ちがった)

・ The rain was pelting down harder than ever now and I could see it dripping from the brim of his hat on to his shoulders.

* than ever now : ますます

「雨がしたたった。そして私の目に入った」

(雨は激しくなってきた、その人の帽子の縁から肩に滴がしたたり落ちていました)

・ But that's of no importance so long as I can get home and rest these old legs of mine.

* 「家に着き、そして脚を休める」

(ちゃんと家にたどり着いて、この脚を休ませてやりさえすれば何も問題はないのです)

増刷出来! 変化に惑わされない「真理」

翻訳とは何か - 職業としての翻訳

山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甦る名著 - 絶妙に英訳された15万用例

NEW 斎藤和英大辞典普及版

斎藤秀三郎著 A5判・1,800頁 本体6,800円
ご要望にお応えし、お求めやすい「普及版」を発売

TranRadar 電子辞書 SHOP

<http://www.nichigai.co.jp/translator/>

定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日 外 ア ソ シ エ ー ツ

<http://www.nichigai.co.jp/>

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

03-3763-5241

(4) 前節の帰結：(3)ととれることもある。
 ・ Learning a new language implies approaching a new world and it inevitably leads to a widening of intellectual experience.
 * it は「新しい世界に近づくこと」
 「新しい世界に近づいて、それで当然...」
 (新しい言語を学べば新しい世界へ近づき、知的経験を広げることにつながる)

・ He had no conventional education and all his life remained an illiterate.
 * 「普通の教育を受けていない。それで...」
 (彼はまともな教育を受けておらず、一生無学のままで終わった)

・ Slightly alter the expression, and you slightly alter the idea.
 * 命令形 + and : そうすれば
 (ちょっとでも表現を変えれば、考え自体も少し変わることになる)

(5) 逆接：順接に訳しておかしくない場合もある
 ・ She tried hard and she failed.
 「やった。しかし...」
 (一生懸命やったのに、失敗した)

・ Meanwhile time runs by and is gone, and I am none the worse.
 * run by と is gone は、対等。and I ~ は「そして...」
 とも訳せるが、訳文の説得性が弱まる。「時は去りゆく。が、しかし...」
 (そうこうするうち時は過ぎ去るが、それで困ることはない)

・ Are you going away, and you came only this morning?
 * 前後を強く対照させている。付加の気持も入る
 (今朝来たばかりなのに、もう行ってしまうのか)

(6) 付加：文字通りつけくわえる
 ・ We have to judge them, and that very hastily.
 * that : 前節全体を指す。and that の訳としては定型的に「それも」
 (わたしたちは相手を判断せねばならない、それも急いで)

・ This is expressed most beautifully in all Japanese art, and particularly in haiku.
 「しかもとくに俳句に」
 (これはあらゆる日本の芸術、とりわけ俳句に、とても美しく表現されている)

・ The idea can only exist in words, and it can only exist in one form of words.
 * カンマの前でいったん意識は切れるが、言い足りなくて and 以下を付け加えている
 (思想は言葉の形になってはじめて、しかも一定の言葉となってはじめて存在できる)

3、演習

and はそれぞれどの役割なのか考えながら、訳して見てください

If he waits till he is in the mood, till he has the inspiration as he says, he waits indefinitely and ends by producing little or nothing.

Here was a big plate-glass window along the front of the pub, and although it was a bit steamy on the inside, we could see through it very well if we went close.

The golden mean is an uninteresting doctrine, and I can remember when I was young rejecting it with scorn and indignation, since in those days it was heroic extremes that I admired.

Henri Rousseau worked as a minor official in the customs for about twenty years and then retired on a tiny pension and painted to his heart's content for another twenty-five years.

偉大な哲学者たちの発想法を自分のものにする道具箱

ISBN4-04-791441-X 定価 本体一八〇〇円(税別)

考える道具

ツール
ニコラス・フアーン
中山元 訳

プラトンもデカルトも
 ウイトゲンシュタインも、
 こんなにシンプルに考えた！

哲学のさまざまな概念は、どのような背景のなかで生まれてきたのか、そして現代を生きるわれわれはそれらの概念をどう活用すればよいのか。思考しながら生きるすべての現代人に贈る、驚くほどシンプルで面白くて役に立つ哲学入門書。

 **角川書店**

But much as we resemble one another we none of us exactly alike, and I have seen no reason why I should not, so far as I could, choose my own course.

Truth, however, is not always interesting, and many things are believed because they are interesting although, in fact, there is little other evidence in their favour.

Some books are to be read only in parts; others to be read but not curiously, and some few to be read wholly, and with diligence and attention.

If one side did not like one of his decisions, he would stop the game then and there and let the players on both sides swear at him as much as they pleased and call him the worst names they would think of until they were tired of arguing and wanted to get back to playing ball.

end by は、...で終わる。and は帰結「それで」。he は、ここでは作家

ものを書く気分ひたるまで、作家のいう直感力がつくまで待つとしたら、延々と待つことになりほとんどなにも書かずに終わってしまう。

ゆるい順接「そして」

パブの前面は大きな窓ガラスになっていて、中はいささかムッと煙っているが近づいて目を凝らせばとてもよく様子がみえた。

前節の提起について、and 以下でコメントする、ゆるい順接。後の and は、対等。

中庸とは面白みのない信条である。若い頃私が高く評価していたのは極端な英雄主義であったから、中庸をさげすみ憤慨してはねつけた覚えがある。

on : ...を頼りに。前の and 自体はゆるい順接だが、then と合わさりきつい順接「それで」になる。後の and は retired と painted を並列、きつい順接とも前節の帰結ともとれる

アンリ・ルソーは税関の吏員として二十年ほど働いたあと、わずかな年金を頼りに退職し、あとの二十五年は心の向くまま絵筆を振るった。

カンマの前の事実に対し、以下結論を導く。帰結の and

しかしいくら似ているとはいえ、そっくり同じ人間は一人としていないのだから、独自の道を選べるならそうしていけない筈はないと考えてきた。

真実はずねに面白いとは限らない、という真理と、面白いから信じられるという現象を対照させている。逆接の and

正しいという証拠はほとんどないのに、面白いからといって信じられている事は多い。だが真実といったものは必ずしも面白いとは限らないのだ。

セミコロンの前後が対比されている。some に対して others だが、others に対し更に別のという意味で次の some few が使われている。1 番目の and は、前文全体と以下の文全体を対等に置く。2 番目は、付加「しかも」(wholly と with 以下を並列させているととれなくもないが、このカンマに区切りの役割を見たほうがよいだろう)。3 番目は、対句で対等

部分的に読めばいい書物もあれば、読むにしてもさほど熱心でなくてよい書物もある。入念に注意深く全部読んだほうがよい書物も少数だけがある。

4 つの and の働きは異なる。1 番目、then and there の対等の形(イディオム「即座に」)で、stop に従属。2 番目、stop と let を並列し、きつい順接。3 番目は、swear と call を並列(ともに let に従属)し、対等。最後のは、tired と wanted を並列し、きつい順接あるいは帰結

もし一方が判定に不服だと即座に試合を中断し、両方の選手に心ゆくまで自分をののしらせ、思い浮かぶかぎりの悪口雑言をいわせる。するとしまいにはどちらともいい争いにあきて、早く試合を再開したいと思うようになるのだった。

吉田健一訳『ロビンソン漂流記』

山岡洋一

ロビンソン・クルーソーの物語ならたぶん、誰でも知っている。しかし、知っているのは絵本や子供向けの脚色版で読んだからで、原作を読み通した人は少ないのではないだろうか。もったいないことだ。原著は刊行が1719年というから、もう300年近くも読みつがれてきたことになる。300年という時の試練を経てきた本が面白くないはずがない。吉田健一訳で『ロビンソン漂流記』（新潮文庫）を読めば、思いもしなかった魅力を発見できるに違いない。

本書の最大の魅力はもちろん、孤島への漂流という物語の面白さだが、それだけではない。波瀾万丈ではない部分、つまり孤島での日常生活を詳細に描いた部分がじつに面白いのだ。デフォーはこの本で「資本主義の精神」を見事に描いたと、何人もの経済学者が論じているほどである。たとえば、こういう部分がある。

私は私の現在の境遇について真剣に考え始めて、それを書いてみた。それは、私の後に来るものに見せるためではなく、そういうものがあるとは思えなかったが、毎日同じことを考え続けて、気を滅入らせたくないからだった。そしてその頃は私の理性が私の失意に打ち克つようになり、私はできるだけ私自身を慰めて、私の境遇のいいことと悪いことを比較し、境遇としてはまだ増しなほうであることを明らかにしようとした。私は次のように、帳簿の貸方と借方と同じ形式で、私の生活で楽なことと辛いことを並べてみた。（吉田健一訳『ロビンソン漂流記』新潮文庫*、75ページ）

* 1998年の改版後のものを使った。それ以前の版とはページと表記に若干の違いがある。

この後に悪いことと良いことがそれぞれ6項目、左右に並んでいる（訳本では上下に並んでいる）。悪いことの第1には「私は救出される望みもなく、この絶島に漂着した」、良いことの第1には「しかし私は生きていて、船の他の乗組員は全部溺死した」と書かれている（同75～76ページ）。

何度読んでも、思わず笑ってしまう。複式簿記の考え方を応用して現状を分析しようとしているのだから。

原著についてはこれぐらいにして、翻訳について触

れていこう。新潮文庫版の解説と奥付をみると、翻訳は1950年、初版発行が1951年である。訳者の吉田健一は1912年生まれだから、40歳にならないころの訳だ。そして当時の首相は父親の吉田茂だ。時代が違うといえはそれまでだが、50年前には首相も偉かったが、首相の息子も一流だったのだ。

それはともかく、吉田健一訳の特徴をみていこう。すぐに気づくのは、日本語で書かれた小説だと言われても違和感がないほどの文章で訳されていることだろう。戦後間もなくのこの時代には、本来楽しみのために読む小説すら、学術論文であるかのように、研究の対象として読まれ、訳されることが多かったので、吉田健一が小説を小説として読者に届けようとしている点は注目に値する。

こういう姿勢は、ごく小さな点にあらわれている。たとえば、以下の部分を見てみよう。

この旅行で、私は多くの愉快的発見をした。低地には野兎や、狐に似た動物がいた。しかしこれは私がそれまでに他所〔よそ〕で見たのとは、だいぶ種類が違って、何匹かを撃ったが、食べる気にはなれなかった。しかし無理に食べようとする必要もなく、獲物は豊富で、しかも美味なもの、殊に山羊と、鳩と、海亀が多かった。これに、私が持ってきた乾葡萄を加えると、私のようなものがロンドンにいてもあり付けられないような食事をするのができた。……（同128ページ）

何ということもない文章だと思えるかもしれないが、たとえば、1995年に出版された以下の訳と比較してみるといい。

……ことに山羊と鳩と亀の三種類は豊富で、それに葡萄を加えれば、レドンホール市場でも、人数の割合からいえば、私よりもみごとな食卓をととのえることはできなかったであろう。……（鈴木建三訳『ロビンソン・クルーソー』集英社文庫、152ページ）

「レドンホール市場でも」というのは、いってみれば正しい訳だ。原著にはこう書かれているからだ。

... especially these three sorts, viz. goats, pigeons, and turtle or tortoise; which, added to my grapes, Leaden-hall Market could not have furnished a table better than I, in proportion to the company; ... (D. Defoe, Robinson Crusoe, Penguin Classics, p. 122)

原著には London とは書かれておらず、Leaden-hall Market と書かれている。だが、Leaden-hall Market は 1715 年のイギリスの読者にとって意味をもつ言葉だったのだろうが、1950 年の日本の読者の立場で考えてみると、「レドンホール市場」という言葉は何の意味ももたない。吉田健一はイギリスの大学で学んだのだから、Leaden-hall Market を知らなかったとは思えないが、読者の立場を重視してさりと「ロンドンにいても」と訳す。こういうちょっとした工夫によって、それも読者の立場を考えた工夫によって、吉田健一の訳は楽しんで読める文章になっているのだ。

ちなみに鈴木建三はこの部分に「ロンドンのレドンホール街にある食料品市場」という割注をつけている。英和辞典にもそう書いてあるので、蘊蓄を披露したことにはならず、読者を興ざめさせるだけになる。

もうひとつ、鈴木訳の「人数の割合からいえば」も、意味がよく分からない。「レドンホール市場でも、人数の割合からいえば、私よりもみごとな食卓をととのえることはできなかつたであろう」とは、どういう意味なのか。「レドンホール市場」だから分からないのであれば、「築地市場でも」か「デバ地下でも」と読みかえてみるといい。分かるような気がしないでもないが、やはり分からない。

原文を読むと、ああそうかと思える。原文のうち in proportion to the company の部分を「人数の割合からいえば」と訳しているのだ。この company を「人数」と解釈したのだ。原著は 1719 年に出版されており、日本でいうと近松門左衛門の『国性爺合戦』と同じころの作品だから、いまの英語の感覚で読むととんでもない間違いになる可能性がある。この company の意味も「人数」で正しいのかどうか、よほど検討しないと分からない。だが、company にはもともと「ともに食事をする人」という意味があるので、無茶な解釈ではないように思える。そこで、「人数」と考えると、「レドンホール市場で（デバ地下で）買い物をして、私一人の食卓にここまで豪華な料理を並べることはできないだろう」といっているとも考えられる。

だが、そう考えられるのは、訳文からではなく、訳文と原文を対象させてみたときである。訳文からは、いったい何を書いているのだろうという疑問が起こるだけだ。

そこで吉田訳をみってみる。「私のようなものがロンドンにいてもあり付けないような食事をする事ができた」とある。英文和訳という観点からは対応がはっきりしない訳だ。だが、上述の「私一人の食卓に」を「私のようにひとりで食事をするしかないものに...」とするのはごく自然だし、そこから「私のようなものが」までは、小さな飛躍にすぎない。

しかし、ここで当たり前のことを確認しておくべきだろう。翻訳は対訳ではない。原著と訳書を並べて読む人は英語か英文学の学習者が研究者であって、本来の読者ではない。だから、原文の一語一区をどう訳してあるのかは、読者にとって問題ではない。重要なのは、訳文を読んで、意味が分かるかどうかである。

そのような観点から、吉田訳と鈴木訳を比較してみると、どちらがいいかははっきりしている。鈴木訳は英文和訳という観点では正確なのかもしれないが（間違いである可能性も捨てきれないが）、訳文を読んでも何が書いてあるのかがよく分からない。吉田訳は英文和訳という観点では若干曖昧で、対応を判断しづらいが、読めば分かる文章だ。読者の立場で、吉田訳を選ぶのが当然ではないだろうか。

吉田健一は以上のように、対訳としての「正確さ」を追求するのではなく、小説を楽しもうとする読者に親切な文章を書く姿勢をとっている。ごく少数、馴染みのない単位（たとえば液量の単位のクォートなど）に割注を付けているが、それ以外には訳注らしい訳注はない。本文だけで読者が理解でき、楽しめるように工夫されている。その後出版された訳が意識的にか無意識にか、原書講読用のような印象になっているとは大違いだ。

だが、これができたのは、一流の文章家・評論家であり、十分な学識をもっていたからであることを指摘しておくべきだろう。実力のないものが下手に真似すれば、読者に親切な文章のつもりが、幼稚な文章になるだけだ。